

タイトル	太宰治と『井伏鱒二選集』：編集者・石井立と戦後文学
著者	石井，耕；ISHII，Kou
引用	北海学園大学学園論集(157)：63-76
発行日	2013-09-25

太宰治と『井伏鱒二選集』

—— 編集者・石井立と戦後文学 ——

石 井 耕

1 井伏鱒二選集の編集開始

『井伏鱒二選集』は、太宰治の突然の自殺によって、その成立の経緯が注目されている。そして、井伏鱒二と編者の太宰治の間に立っていた編集者が石井立である。経緯の詳細を知るのは、この三人と、石井立から報告を受けていた古田晁しかいない。まず前稿（「できるかぎりよき本」）から再録する。

「井伏鱒二選集についての編纂打ち合わせは、井伏、太宰、古田、石井に白井吉見の五人で、昭和22年夏に行われたのである。その後、井伏鱒二の太宰治宛て22年9月4日付け書簡によれば、次のようである。

「先日、展望編集の石井君が来て、君が病気で臥てゐることを知らせてくれました。就ては、さっそく見舞ひに出かけようとしたところ、いや、ちょっと待ってくれと石井君が引きとめて、見舞ひを受けることは断じて御免を蒙りたいと伝言してくれと君が石井君にことづけ云った由。

（中略）

さて、僕の選集のことは君の病気が完全になほつてから気のむいたときに願ひます。急いでもらひたい気持は全然ないのです。せんだつて石井君に目録を見せてもらひましたが大体あれで全部だらうと思ひます。あとから出すのは今のところ新作集は一卷だけの予（定）です。出たら届けます。」（『太宰治全集』）

このように、太宰治と井伏鱒二のあいだを、石井立が「選集」の編集のために行き来していたのである。それでは、この「目録」や「新作集」とは、何を指すのであろうか。

井伏の書簡にあった「目録」は、石井立が作成したと推定される「井伏鱒二著作目録」である。昭和4年の『夜ふけと梅の花』から『引越やつれ』（未刊）までの43冊および追加の『頓生菩提』（昭和10年）を含む目録である。○印が「(実物)アリ」、(実物)返却、スミ、レ印（「風俗」のみ）などが付けられている。さらに、未刊の雑誌掲載分、河出書房からの「ちくま石井氏」宛の「河出：井伏鱒二“詩と随筆”」目次（実際には昭和23年5月10日刊）などがある。井伏の言う「新作集」は『引越やつれ』か『詩と随筆』のいずれかと推定される。この『詩と随筆』は「目録」

に含まれていない。他に「第六巻」「第七巻」と書かれたものもあり、当初の七巻構成の編集途上の資料であると見られる。

この「目録」を井伏鱒二に確認してもらい(昭和22年9月4日書簡)、著作(刊行本)実物を見ながら太宰治の編集作業がはじまったと推測される。そして、第1巻後記が「昭和22年晩秋」に書かれている。(ここまでは「できるかぎりよき本」再録、「目録」と『詩と随筆』目次の写真も収録してある)。

「著作目録」は、出版された著書が対象であり、初出の雑誌が対象ではない。

太宰の井伏鱒二選集第一巻後記は次のように書かれている。

「ことしの夏私はすこしからだ具合ひを悪くして寝たり起きたり、そのあひだ私の読書は、ほとんど井伏さんの著書に限られてゐた。筑摩書房の古田氏から、井伏さんの選集を編むことを頼まれてゐたからでもあつたのだが、しかし、また、このやうな機会を利用して、私がほとんど二十五年間かはらずに敬愛しつづけて來た井伏鱒二といふ作家の作品全部を、あらためて讀み直してみる事も、太宰といふ愚かな弟子の身の上にとつて、ただごとには非ざる良薬になるかも知れぬといふ、いささか利己的な期待も無いわけでは無かつたのである。」

「目録」をもとに、著書を読み、選集編集の草案1および草案2を書いたことは明確である。ただし、この段階では七巻構成である。詳細は前稿に譲るが、昭和23年2月まで七巻構成であったことは『展望』昭和23年3月号広告という明確な証拠がある。新発見の草案3で、九巻構成に変更されたのである。(草案3は、太宰の自筆で、前稿に写真を掲載した)なお、『展望』昭和23年5月号広告には、巻数構成は出されていない。

草案1および草案2の執筆時期は昭和22年夏と推定されている(『太宰治全集』)。9月4日の書簡のことを考えると、もう少し遅く22年秋ごろかもしれない。

また、太宰の自筆資料が遺されているので、草案1および草案2は、太宰が選んで書いたということとは明白である。逆に言えば、ここに入っていない作品は、太宰が選ばなかったのである。また、草案1および草案2は、それぞれまとめて書かれたものであり、第一巻が先行したということもありえない。ここが重要である。草案1および草案2に入っていない作品は、太宰が選ばなかったのである。

昭和22年晩秋に書かれた第一巻後記は、上述のように師・井伏鱒二への敬愛の込められた文章となっている。

2 川端龍子の題字

草案2に基づいて、井伏鱒二選集の編集は進行した。

井伏鱒二選集の題字が遺されている。これは、装丁者川端龍子の作品であり、この題字についての、昭和22年12月21日・28日、23年1月22日の石井立宛ての手紙も遺されている。この頃

までに、少なくとも題字が一枚の紙に書かれた第五巻までは、書名は固まっていたのである。

この題字は『展望』昭和23年3月号の広告とも整合している。滝口も指摘した、この広告では、新刊として第一巻が予告されている。編輯解説太宰治、装丁川端龍子で、全七巻となっている。「續刊」として「第二巻 悪い仲間 青ヶ島大概記他十三篇」「第三巻雞肋集 川・集金旅行」「第四巻圓心の行状 川井騒動他十五篇」「第五巻多甚古村 さぎなみ軍記」「第六巻厄除け詩集 詩（續）と随筆」「第七巻引越やつれ 終戦後の新作集」の構成である。

「第二巻 悪い仲間 青ヶ島大概記他十三篇」が重要である。実際に刊行されたのは十五篇ではなく、十三篇であった。二篇削除されているのである。

一方、第六巻と第七巻は、この後大きく変更されている。草案3に編集し直されたのである。

後記の執筆時期は、第一巻については「22年晩秋」と書かれている。二巻から四巻は明確ではない。一方、23年4月7日と4月27日に、石井立による口述で書かれたことは、前者は山崎富栄手記、後者は白井吉見「人間失格」の頃、唐木順三「仮説の神」、『筑摩書房の三十年』などから、わかる。4月7日が何巻、4月27日が何巻と特定できないのである。

昭和23年4月3日について、相馬正一（『評伝太宰治 第三部』（昭和60年7月、筑摩書房））は、次のように書いている。

「井伏鱒二は、「如是我聞」の一回目を読んでその異常さに気づき、太宰がまた薬物中毒に陥っているのではないかと懸念した。「暗夜行路」完結以後、開店休業状態にあったとはいうものの、志賀の文壇における影響力の大きさを考えると、太宰の志賀攻撃はほとんど自殺行為に等しいと思ったからである。

そこで井伏は、六月刊行予定になっている『井伏鱒二選集』第二巻の「後記」（太宰の執筆）のこともあって仕事部屋（富栄の部屋）に太宰を訪れ、雑談の中で「如是我聞」にも言及し、志賀を個人攻撃するのは太宰の将来にとって得策でない旨を述べて、暗に中止を申し入れたという。

相馬のこの文章は、井伏への聞き書きによると思われる。昭和23年4月の「後記」執筆を「第二巻」としたのも、相馬である。4月3日の訪問において、「後記」のことに「如是我聞」のことに、太宰と井伏の最後の会話の話題は二つあったのである。むしろ、主は「後記」執筆についてであり、「如是我聞」は雑談程度であった。（梅林という青年の自殺未遂のこともあった）

3 青ヶ島大概記の皮肉

昭和23年2月頃の井伏鱒二選集の編集作業については、伊馬春部の「あど・ばるうん記」という証言がある（『井伏鱒二選集通信（月報）』第二号（第四巻付録））。

伊馬が太宰に会った最後である。太宰のもとを訪ねた伊馬が、選集には「仕事部屋」がのらないのか、と尋ねたところ、載らないことがわかったのである。しかし、草案1にも草案2にも「仕事部屋」はもともと入っていない。従って、「仕事部屋」は太宰も入れる気がなかったのである。

「あれは出ません、それは困る出していただくやないかなど言ってゐると、そんなこといふと叱られるぞ、僕もひどく叱られたんだからと太宰は、盃をおいて後記の校正にししと目を注いだ。(後略)」このときの校正は、3月25日出版の第一巻と考えられる。

問題の第二巻後記に出てくる「青ヶ島大概記」は、伊馬春部が井伏鱒二に貸した資料をもとに書かれている。井伏鱒二は、「社交性」(昭和31年)の中で、「資料は伊馬春部君が伊馬君の恩師の折口信夫氏のところから借りて来てくれたもので、私は記録文学風にするつもりから資料の文体を真似ながら書いてゐた。太宰君は将棋がすむとちよつと私の原稿を見て、口述するなら筆記して手伝つてやらうと云つた。」と書いている。

この資料は、近藤富蔵が八丈島に流された時の記録である。「青ヶ島大概記」の附記として「八丈島の流刑人近藤富蔵の「八丈実記」を引用した。」と明記されている。近藤富蔵は、旗本近藤重蔵守重(正斎)の長子であったが、隣人の農民を殺傷する事件を犯して流刑となったのである。なお、富蔵は、明治になり、51年振りに赦免された。その後も八丈島に住み、明治20年、83歳で没した。

近藤重蔵(1771-1829年、明和8年-文政12年)は、もともと御家人の家に生れたが、幕臣として多方面に活躍して旗本となった人物である。長崎奉行所手付出役などを経て、松前蝦夷御用取扱となり、最上徳内とともに択捉島に渡り、「大日本恵土呂府」の標柱を建てたのである。その後書物奉行、大坂勤番弓奉行などを務めた。多くの書物を執筆しているが、一方では奇矯な振る舞いも多かったと言われている。文政9年の富蔵の事件で改易となり、近江で蟄居のまま死去した。富蔵の事件も不思議なことが多く、重蔵自身の関与も疑われていた。

話は戻るが、太宰は井伏選集第二巻後記に「今回もこの巻の「青ヶ島大概記」などを中心にして、昔のことを物語ろうと思う。」として、いくつかの出来事を書いているのである。そして次が問題の皮肉の箇所である。少し長いが引用しよう。

「私は一字一字清書しながら、天才を実感して戦慄した。私のこれまでの生涯に於て、日本の作家に天才を実感させられたのは、あとにも先にも、たったこの一度だけであった。

「おれは、勉強しだいでは、谷崎潤一郎には成れるけれども、井伏鱒二には成れない。」

私は、阿佐ヶ谷のピノチオという支那料理店で酔っ払い、友人に向ってそう云ったのを記憶している。

「青ヶ島大概記」が発表せられて間もなく、私が井伏さんのお宅へ遊びに行き、例によって将棋をさし、ふいと思い出したように井伏さんがおっしゃった。

「あのね。」

機嫌のよいお顔だった。

「何ですか。」

「あのね。谷崎潤一郎がね、僕の青ヶ島を賞めていたそうさ。佐藤(春夫)さんがそう云つてた。」

「うれしいですか。」

「うん。」

私には不満だった。」

これに対して、井伏鱒二は「社交性」(昭和31年)のなかで、次のように書いている。

「繰り返して云ふが、私の「青ヶ島大概記」といふ記録物は、資料からそのまま文章を引用したところが可成りある。太宰君は実際にはその場に立会つて真相を知つてゐるにもかかはらず、讃めるに事欠いて粉本そのままの文章のところを抜萃し、私に天才を感じ戦慄したと書いている。(中略)不正直を生理的に厭やがつた太宰にして、こんなことを書くのは私に対する皮肉だと思つて間違ひない。

私はこの皮肉を自分に噛みしめなくてはならぬ。(中略)

尚、太宰君は上述の文章に続けて、谷崎潤一郎氏のことを書いてゐる。そして佐藤(春夫)さんのことも引合に出してゐるが、私は佐藤さんからそんなことを聞いた記憶もないし太宰君に云つた覚えもない。(中略)

造りごとの挿話で人を讃め、讃められる当人を秘かに赤面させるのは、慇懃尾籠の一種である。しかし、上述の太宰君の後記の場合は、ずるぶん持つてまはつた現はれかたをした社交性ではなからうかと考へる。(後略)」

太宰は、どうしてこのような皮肉を書いたのか。

4 昭和23年3月 井伏鱒二から石井立への手紙

井伏鱒二選集の編集に、著者本人の意見が入るのは当然である。どんな著者であっても、自作の選集に意見を表明する。ましてや、井伏は、後年「山椒魚」の末尾を削除するほど、自作にこだわり続けた文学者である。同じ作品に何回も手を加えている。

太宰は、井伏鱒二の選集を編むということを、かなり安易に考えていたと思われる。これまでの著作を一応読んで、そこから自分が選べば済むと思っていたのだろう。

井伏は「急いでもらひたい気持は全然ないのです。」とむしろ消極的でした。そこを太宰が押し切つて選集出版にこぎつけたのである。

しかし、太宰の編集案について、著者本人の井伏としては、どうしても違和感があった。第一巻は『夜ふけと梅の花』がほとんど所収されており、問題はない。「谷間」を付け加えたただけである。しかし、第二巻以降はそうではない。草案1から草案2へと修正したものの、井伏の考えと異なる。両者のあいだに入って、石井立がお互いの考えを伝える役割を果たした。それでも一応第二巻の構成が十五篇と決まって組版の準備に入ったのである。

ところが、昭和23年3月15日の井伏鱒二から石井立宛書簡がある。

「前略。校正御届けいたしますが巻頭的一篇『たま虫を見る』は削除して頂き度いのです。何と

しても拙い代物にて冷汗が出ますので、誠に御手数恐縮ですが、お願いいたします。組版の損害は弁償します。願ひします。

後略忽々

三月十五日

井伏鱒二

3月15日のこの手紙が発端であろう。組版が済み、校正段階に至った後に、第二巻から削除されたのは、この「たま虫（蟲）を見る」と「森」の二篇である。草案2と実際に出版された第二巻を比較すれば、明白である。

「井伏さんはそれに頑固に反対なさって、巻数が、どんなに少なくなつてもかまはぬ、駄作はこの選集から絶対に排除しなければならぬといふ御意見」と太宰治は第二巻後記に書いている。本人である井伏としては、絶対に譲れないところである。

3月15日には、太宰は熱海にいた。一旦3月19日に東京に戻るが、用事を済ませて、3月21日熱海に向かった。「人間失格」の「第二の手記」までを書きあげて、ふたたび東京に戻ったのは、3月31日である。そして後述する4月3日を迎える。

井伏鱒二選集第一巻が刊行されたのは、3月25日である。

5 第二巻の構成の変化

七巻構成の『井伏鱒二選集』の編集に関する草案は、太宰治によって、昭和22年秋に作られた。草案1と草案2がある。さらに、石井立所蔵資料から、九巻構成の草案3が発見され、昭和23年4月に作成されたと推測される。

井伏と太宰の確執の原因となったのが、第二巻（草案1では第三巻）の構成である。草案1の第三巻の構成は、次の通りである。

川、たま蟲を見る、悪い仲間、丹下氏邸、言葉について、或る部落の話、雨の音、掏摸の棧三郎、りべるて座、一風俗、圓心の行状、鸚鵡、猿、冷凍人間、青ヶ島大概記 15篇

草案2の第二巻の構成は、次の通りである。(線)とあるのは、草案において線で消されていることを示す。昭和23年2月8日太宰が伊馬春部に言った「そんなこといふと叱られるぞ、僕もひどく叱られたんだから」は、この草案1と草案2の変更のときであったと考えられる。

たま蟲を見る、談判(線)、或る父友の素描(線)、十二年(線)、丹下氏邸、悪い仲間、背の高い椅子の誘惑(線)、風雨強かるべし(線)、蒲團屋の來訪(線)、先生の廣告隊(線)、晩春、女人來訪、喪章のついてゐる心(□)懐、ユキコ(線)、掏摸の棧三郎、経緯(線)、客人(線)、言葉について(線)、使徒アンデレの手紙(線)、森、〔頓生〕冷凍人間、りべるて座(線)、青ヶ島大概記

線で消されているのが13篇である。残されたのが、10篇である。昭和23年3月号の『展望』の広告では、「悪い仲間、青ヶ島大概記他十三篇」となっている。昭和23年5月号の『展望』の広告では、「悪い仲間、青ヶ島大概記、丹下氏邸、女人來訪、掏摸の棧三郎、冷凍人間等——佳品十五篇」となっている。ここに出ている6篇以外には、どの作品が予定されていたのだろうか。草案2で残された作品としては、

たま蟲を見る、晩春、喪章のついてゐる心懐、森

の4篇である。このうち、実際に刊行された第二巻では、

晩春、喪章のついてゐる心懐、使徒アンデレの手紙(復活)

の3篇に、

岩田屋のクロ、「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること、湯島風俗、中島の柿の木

の4篇が入っている。前3篇は、草案2では、第四巻に入っていた作品である。「中島の柿の木」は、草案2にはない。ちょうど草案2と草案3のつなぎの部分に入っている。草案3は、草案2の続きなのである。草案3で、第四巻に入っていた篇である。すなわち、4篇が第四巻から第二巻に移動したのである。広告に出ている6篇、草案2で残された4篇、第四巻から移動した4篇、復活した「使徒アンデレの手紙」の計15篇が、『展望』3月号・5月号の広告に出ていた15篇と見て間違いがない。3月に組版が出来て、広告も出されているのだから、遅くとも2月頃には、この15篇で固まっていたと見られる。

そして、実際に刊行された第二巻には13篇が入っている。削除されたのは、

たま蟲を見る、森

の2篇である。組版が出来てから、3月15日の井伏の書簡によって、少なくとも「たま蟲を見る」は削除されたのである。「森」も同様と考えられる。そして、太宰が帰京した3日後の4月3日の井伏鱒二の訪問によって、最後の二人の「相談事」がなされたのである。「井伏さんはそれに頑固に反対なさって、巻数が、どんなに少なくなつてもかまはぬ、駄作はこの選集から絶対に排除しなければならぬといふ御意見」だったのである。それは、第二巻の収録作品に留まらず、選集全体の構成についての、著者井伏と編者太宰の「相談事」あるいは確執であった。後述するが、太宰

は「甲斐ないひと」「ちょっとした偽善者」と受けとめた。一方、著者井伏にとっては、「駄作の排除」は絶対に譲れない主張だったのである。

6 師 弟

戦後、師弟は何回会ったか。井伏鱒二は「三回」と書いている(「太宰君の仕事部屋」昭和31年)。別のところ(「おいしい人 太宰君のこと」昭和23年8月)では、「東京に来てからも一年ちかくのうちに四度しか会はなかつた。」と書いている。井伏が、疎開先から東京に戻った昭和22年7月から三回か四回である。様々な資料から、二人の会った状況を浮き彫りにしてみよう。

一回目が、前述したように、昭和22年夏、山崎富栄の部屋で、『井伏鱒二選集』について打ち合わせをしたときであることは確かである。古田晁、白井吉見、山崎富栄、石井立が同席した。井伏は「をんなごごろ」(昭和25年)の中で、次のように書いている。「彼女の下宿部屋を太宰が仕事部屋に使つてゐた当時、私は三度太宰を訪ねた。最初は、出版のことで打ちあはせをする用事で訪ねたが、某女と口をきく必要がなかつたので、お互に殆ど口をきかなかつた。」ただし、ここでいう三度目の訪問は、4月28日の青柳瑞穂の夫人の葬儀の日取りを知らせにいった時で、訪ねていったが、太宰に会えず、伝言しただけである。二度目の訪問は後述する4月3日である。

二回目は昭和23年の正月の年始である。「おいしい人」(昭和23年8月)では、「正月元旦に会つたとき、病気が悪いさうではないかとたづねると、いや、あんな噂はみんなデマだ、人はデマばかり弄して迷惑させられると云つた。」と書いている。

そして、「今年の二月ごろ最後に会つたときは、二時間ばかり話すうちに、彼は二十分ばかり二度もからだを横たへた。」これは2月だろうか。「最後」の四回目は4月ではないだろうか。「太宰治の死」(昭和23年8月)でも「今年の一月下旬であつたか二月上旬であつたか、最後に太宰に逢つたときにも、二時間あまり話す間に彼は二十分許り、二度も横になり、又起き上つて話をした、随分疲れてゐて新聞の連載なども引き受けられる身体ではないと思つてゐた。(中略)その女性には僕は前後二度会つた。一度は選集を出す打合せのとき筑摩書房の人達と一緒に太宰の処へいつたとき、一度は太宰の処で、眠薬を飲んだ者があつたのでその見舞にいつたときである。」と書いている。「眠薬を飲んだ者があつた」というのは、後述する4月3日のことである。また、新聞連載の「グッド・バイ」のことが出てくる。ここからも4月と考えられる。同じ時のことだと思われるが、この二つの文章では、二人で「二時間」話したのである。何らかの「相談事」があつたと考えられる。

三回目は『小説新潮』の昭和23年2月号に掲載された写真の撮影時である。撮影北野邦雄であ

り、太宰のこやかな顔が印象的である。井伏鱒二のコメントは次の通りである。

「二人ならんで釣堀で魚つりをしてゐる場面。または二人で武蔵野の森のなかを散歩してゐる場面。雑誌社のさういふ注文であつた。ところが太宰君は仙台平の袴をはいてやつて來た。魚つりは止すことにして森のなかに行くことにしたが、いまどき袴をはいて林間逍遥をする人はない。袴をぬいだらどうだと云はうと思つたが、しゃがんで寫ることになつたので云はないでもすんだ。

この森は私のうちの近くにある。昔の武蔵野の林の残缺である。芒や熊笹など森の入口に生えてゐるが、最近では塵芥の棄て場所になつてゐてきたならしい。十七八年前ころには、そこにきれいな清水がわき出てゐた。そのころ一度、私は太宰君とこの森へ散歩に來たやうに覚えてゐる。しかし確かな記憶ではない。」

これを読む限り、雑誌掲載のために、昭和23年1月頃に撮影したものであろう。昔の写真を活用したわけではない。戦後三回目の面会である。元日に撮影された可能性もある。

あるいは、「二時間」の「相談事」は、この写真撮影の後、井伏鱒二の家で行われたという可能性もあるが、山崎富栄と会ったことや新聞連載のことを考えると可能性は低い。

四回目は、問題の昭和23年4月3日である。太宰が熱海から東京に戻つたのが3月31日であり、その三日後である。梅林という男が、井伏の紹介という触れ込みで太宰を訪ねてきて、深夜山崎富栄の部屋で大量の睡眠薬を飲んで自殺を図つたのである。知らせを聞いて、井伏も駆けつけたのだが、「山崎富栄手記」によれば、井伏のことを「甲斐ないひと。」と記されている。「をんなごころ」(昭和25年)では、太宰は井伏に対して、梅林について「いや、三十分ばかり恨みました。実は、ほんのちよつと、三十分ほど恨んだだけです。もう何ともありません。」と言つたという。

「“悪人”にされた」では「今年の一ヶ月太宰君は催眠剤を飲みすぎて死にかけたことがあり意識をとりもどしたときわたしに“三十分間あんなのことを恨みつづけた”といつたことがある」と話している。これは井伏の談話(『時事新報』昭和23年6月17日)であり、談話の聞き取りが正しいかわからない。つじつまがあわない。太宰が催眠剤を飲みすぎたのは12月(「富栄手記」)であり、12月に井伏鱒二に恨み言を言ったことには、裏づけがない。会っていない。昭和22年12月10日の井伏鱒二から太宰治宛書簡にも次のように書かれている。(『新潮』平成10年7月号)「一昨日甲府の村松君が拙宅に立寄つて、太宰君が病気の由を教へてくれました。見舞ひに行き度いと思ひますが面会謝絶の症状とのことで、また面会に行くのと太宰君の気が散ると思ひますから暫く行かないつもりです。12月には会っていないことは明らかだろう。一方、1月には元日と写真撮影の時と二回会つたのだが、その時に恨み言を言ったのだろうか。

恨み言を言ったのはやはり4月3日の可能性が高い。「をんなごころ」に書かれたように、井伏は梅林のことにする恨み言と受け取り、「筋違い」と反論した。

しかし、富栄の「甲斐ないひと。」の記述は、梅林のことについての記述ではないと考えられる。

他の「相談事」がなされ、そのことについて太宰自身が言ったのである。井伏の3月15日の石井立宛書簡の半月後である。東京に戻って三日後である。

4月14日の「富栄手記」では「お仲人をした井伏さんが、太宰さんを苦しめてゐる。ちよつとした偽善者だ。」となっている。これも太宰自身の言葉だと思われる。なお、14日に井伏と会ったということではない。3日に会ったときの「相談事」が続いているのである。「相談事」について、4月3日に二時間話し、そのことが4月14日にも続いているのである。梅林のことで、このような事態になることは、ありえない。

このことは、太宰治全集年譜にも井伏鱒二全集年譜にも採用されていない。太宰の井伏に対するこの「甲斐ないひと」「偽善者」という評価・批判について、その要因は諸説取りざたされている。「太宰の生活、とりわけ山崎富栄についての、井伏鱒二の苦言」、「如是我聞」についての、井伏鱒二の苦言」などである。しかし、この時期の太宰と井伏の「相談事」の話題として明確なのは『井伏鱒二選集』についてである。井伏鱒二選集については、確実に二人の「相談事」の対象であった。如是我聞についても話題になったが、このことは「雑談」としてであることは前述した。

続けて「山崎富栄手記」では、「4月6日朝、石井さんみえて、書物をとりにゆかれる。野平さんの口述筆記(如是我聞二回)はじめられる。」「4月7日 石井さんみえ、井伏選集の後記の口述筆記。」「4月13日 石井さんみえる」(関連事項のみ)となっている。すなわち、3日から13日の間に、石井立は三回も太宰治を訪問しているのである。石井立は「人間失格」と『井伏鱒二選集』の両方の編集者であるので、訪問の内容はどちらかとは言えない。しかし、4月3日の井伏の訪問、二時間の相談事を前提とすると『井伏鱒二選集』について急を要する事態が出来たと考える方が自然である。この時期に『井伏鱒二選集』の大幅な編集見直しがされ、それに基づいた後記が書かれた可能性は大である。「書物」は、いったん返却していた、あるいは自宅に置いていた井伏の著作だと考えられる。石井立が持ってきた井伏の著作を見て、太宰は再度選集の編集をやり直したのである。これが、新発見の九巻構成の草案3である。4月3日の二時間の「相談事」の内容はこのことであつたろう。太宰は、選集についての井伏の依頼あるいは要求に、「甲斐ないひと」「偽善者」と感じていたのである。

7 昭和23年 太宰治の手帖

安藤宏「太宰治・晩年の執筆メモ」の問題点もこの点について述べている。これは、ご遺族より青森県近代文学館に寄贈され、『資料集』の第二輯(平成13年8月)として刊行された手帖二冊に基づいている。昭和22年と昭和23年の二冊の手帖であり、太宰治が「構想メモ」として用いていたものである。ここで重要な昭和23年の手帖の井伏に関連する部分の要約は次の通りである。漢数字は、安藤がつけたものであり、次いで手帖の頁数となっている。

「五 58-61 『井伏鱒二選集』第三巻「後記」にかかわるメモの一部、「人間失格」に関わると

思われる(ただし小説に該当部分はない)メモからなる。執筆は23年の4月上旬か。」前述の4月7日の、石井立による井伏選集の後記の口述筆記の下書きであろうか。太宰治全集年譜も、4月7日に第三巻後記が口述筆記されたとなっている。

「六 62-70 井伏鱒二を批判した記述。「如是我聞」には実際には入れられなかった。」(井伏批判を「如是我聞」で書こうとしていたということは安藤の推測に基づく。)五に続いており、時期は同じ4月とみられる。言葉は連ねているが、要するに4月3日の「甲斐ないひと」、4月14日の「偽善者」という井伏批判と同じである。69に「ヤキモチ焼き、悪人」という言葉も見える。

「九 111-122 主に「女類」「渡り鳥」「眉山」に関する構想メモ。昭和23年の1-2月頃のものか。井伏鱒二選集に関するメモも一部ある。」109, 110に「食通, 第三巻 井伏サン 食通」というメモがある。

「十 125-139 薄く大きな字で書かれている。「如是我聞」に関する内容が大部分だが、断片的で、本文との対応を特定しにくい。井伏に関する記述も見える。」129は、二巻後記の青ヶ島大概記の清書についてである。問題の皮肉の箇所である。129「青ヶ島大概記清書のこと」「井伏さんおよろこびのこと」130「鏡花, 井伏, 芥川」「谷崎にはなれるやうな気がするけど, 井伏さんにはなれない」一方132は「私の創作の苦しさを知り, 私を敢然と支持して下さった唯一の先輩」である。

以上四ヶ所が昭和23年の手帖における井伏鱒二に関する記述である。

昭和23年4月3日の井伏鱒二の訪問が、両者の最後の対話となった。以降のやりとりは、石井立を介することとなった。それも明確なのは、4月27日の選集後記の筑摩書房での口述筆記が最後である。(4月28日の青柳瑞穂の夫人の葬儀で、井伏と太宰はすれ違っているが、会話を交わしていない)

太宰が井伏を批判した時期が明確なのは、昭和23年3-4月である。それ以前から批判していたことについての明確な論拠はなにもない。3-4月の批判は、井伏鱒二選集の編集を巡る「相談事」がその要因である。しかも、その批判は、井伏鱒二にわかるようには面と向かって表明されてはいない。また、山崎富栄以外に知っていたのは、石井立と報告を受けていた古田晁である。両者は、それについて何も語っていない。

太宰治自身によるこの間の経緯の説明によれば、次の通りである。この太宰自身の言葉に、井伏と太宰の確執は、示されている。

「この『井伏鱒二選集』は、だいたい、発表の年代順に、その作品の配列を行ひ、この第二巻は、それ故、第一巻の諸作品に直ぐつづいて発表せられたものの中から、特に十三篇を選んで編纂せられたのである。

ところで、私の最初の考へでは、この選集の巻数がいくらか多くなつてもかまはぬ、なるべく、井伏さんの作品の全部を収録してみたい、そんな考へであつたのであるが、井伏さんはそれに頑固

に反対なさって、巻数が、どんなに少なくなつてもかまはぬ、駄作はこの選集から絶対に排除しなければならぬといふ御意見で、私と井伏さんとは、その後も数度、筑摩書房の石井君を通じて折衝を重ね、たうとう第二巻はこの十三篇といふところで折合がついたのである。」

この後に太宰が書いたのは、第二巻後記の青ヶ島大概記についての皮肉である。第二巻後記は、「十三篇といふところで折合がついたのである」と書かれていることから、4月27日筑摩書房で、石井立の口述筆記で書かれたのである。『展望』5月号の広告では、井伏鱒二選集第二巻について「佳品十五篇」となっている。一方、後記には「十三篇」と太宰は書いている。従って、二篇（「たま虫（蟲）を見る」と「森」の二篇）が削除され、それをふまえて後記は4月27日に書かれたのである。『筑摩書房の三十年』にも「「悪い仲間」（第二巻）のあとがきを口述」と書かれている。第二巻後記が4月27日、石井立の口述筆記で書かれたのである。第三巻・第四巻後記は、4月7日も含めて、もっと前に書かれた可能性が高い。

8 草案1の文章

太宰治の『井伏鱒二選集』編集草案1には、一卷－四巻後記に入っていない文章がある。選集編集の草案1と草案2は『太宰治全集13巻』（平成11年5月）に収録されている。草案1は、平成2年以前の全集にも収録されていたが、草案2は、この全集に初めて収録された。いずれも七巻構成の段階の草案である。昭和62年に日本近代文学館に美知子夫人から寄贈されている。前述したように、これらの草案は昭和22年秋に書かれている。

草案1の文章のポイントは次の通りである。

第一巻（草案1） 寶石を置き並べるやうな氣持がした。

第二巻（草案1）（「さざなみ軍記」について）井伏さんは、せつかちのやうに見えながら、このやうに一つのを少しも變らずいつまでも永く愛しつづけるお方のやうである。

第三巻（草案1） 井伏さんの大戦前のたくさんの中短編のうちから、私の好きな作品を勝手に選んで収録してみた。私としては、「模範小説集」とでも銘打ちたい意氣込みなのである。

第六巻（草案1） 井伏さんも既に五十歳になられ、その作風には蒼勁の氣色の増して来てゐるのが拜察せられる。（「蒼勁の氣色」とは、「枯れた味があつて力強いこと」）

第一巻（草案1）の文章は、実際の第一巻後記のほぼ基調となっている。

第二巻（草案1）の文章は、新発見の九巻構成の草案3の第六巻に、そのまま用いられている。第六巻（草案1）の文章は、新発見の草案3の第九巻に、そのまま用いられている。近代文学館と石井立所蔵資料にそれぞれ二枚存在するのである。太宰がもう一回書いたのである。

第三巻（草案1）の文章のみ用いられていない。もう一度書こう。「井伏さんの大戦前のたくさんの中短編のうちから、私の好きな作品を勝手に選んで収録してみた。私としては、「模範小説集」

とでも銘打ちたい意気込みなのである。」この部分は、実際には問題の第二巻にあたる箇所である。井伏との「相談事」の結果、この文章は消え失せ、青ヶ島大概記の皮肉が書かれたのである。

しかし、重要なことは、昭和23年4月に書かれたと推測できる九巻構成の草案3(新発見)においても、草案3の第六巻すなわち「いつまでも永く愛しつづけるお方」、第九巻すなわち「蒼勁の氣色」という表現は変更されていないことである。草案3でもう一度書かれているのである。この文章には、井伏への批判は感じられない。

第二巻をめぐる「相談事」のやりとりにカッとした太宰も、井伏を全面的に批判していたわけではないのである。

昭和23年5月以降はどうだろうか。批判は持続したのであろうか。太宰は、古田の紹介で大宮の部屋を借り、「人間失格」を執筆し、5月12日に帰京している。美知子夫人からの荷物を大宮まで運んでいたのは石井立である。5月12日も「石井さんのお迎へを得て歸宅」したのである(「富栄手記」)。それ以降、「富栄手記」には、井伏鱒二に関する記述は見当たらない。石井立との接触もよくわからない。6月13日の山崎富栄手記の遺書の部分に「野平さん(新潮社)、石井さん、龜島さん(八雲書店)、太宰さんのおうちのことで見てあげてください。」という記述がある。また、太宰の「千草」鶴巻夫妻宛て遺書の中に、「お金の事は石井に」という一文がある。

はたして、太宰は6月1日発行の『展望』に掲載された「人間失格」(第1回)の校正はしたのであろうか。

筑摩書房は、具体的には古田晁と石井立は、5月9・10日頃脱稿した「人間失格」の原稿をもらって、次に、選集第五巻以降の後記を書くように依頼していたであろう。しかし、それは書かれなかった。もしかしたら、書くためのメモはあったかもしれない。そこで井伏鱒二批判は持続していたのだろうか。

本稿に関する注：

本稿は、東北大学(中国・瀋陽)第三回中日文化比較研究国際シンポジウム(2012年9月)にて報告され、報告集に掲載予定である。主催者の皆さん、報告にコメントをいただいた皆さんに感謝申し上げたい。

あわせて、三鷹市の三鷹ネットワーク大学の「太宰を読む百夜百冊」において、2012年10月に行った報告「太宰治著『井伏鱒二選集1-4巻』後記および選集草案——編集者・石井立を介して——」も、本稿と多くを重複している。報告にコメントをいただいた皆さんにも感謝申し上げます。

2011年12月28日の「日本経済新聞」に掲載された小文「昭和文壇支えた編集者魂 太宰治や井伏鱒二を担当した父、残した資料追いかける」にも、一部を紹介した。「日本経済新聞」および記事を見て感想を寄せていただいた皆様にも感謝申し上げます。

また、文中では、敬称を略させていただいた。さらに、前稿について、多くの方々から、懇切な感想、ご意見を頂いた。本稿において、参考にさせていただいた。このことについても感謝申し上げます。

関連注：『筑摩書房の三十年』では「(石井立の筑摩書房入社は) 太宰の紹介で、『展望』の編集部にはいった。」としている。これは本論と関係ないが、石井家の親戚に確認したところ、事実ではないということである。入社の際について、京都帝国大学教授の大山定一から古田晁への紹介、あるいは富士正晴から専務・竹之内静雄への紹介(二人は京大時代の親友)と推測し、別稿を準備している。『筑摩書房の三十年』は、太宰と石井立が同じ弘前高校の出身ということで、誤認していたようである。『筑摩書房の三十年』執筆の昭和45年には、石井立は逝去しており、本人に確認することはできなかったのである。

参考文献

- 安藤宏 「「太宰治・晩年の執筆メモ」の問題点」青森県近代文学館『資料集』第二輯(平成13年8月)
石井耕・石井牧・平賀美穂・石井樹 「できるかぎりよき本——石井立の仕事と戦後の文学——」『北海学園大学学園論集』(前編平成22年9月, 後編平成22年12月)
『井伏鱒二選集』(昭和23年-24年) 筑摩書房
『井伏鱒二全集』(平成8-12年) 筑摩書房
井伏鱒二 『太宰治』(平成元年11月) 筑摩書房
伊馬春部 「あど・ばるうん記」(昭和23年11月, 「井伏鱒二選集通信(月報)」第二号(第四巻付録))
小山清編 『太宰治研究』(昭和31年6月) 筑摩書房
奥野健男編 『太宰治研究I その文学』(昭和53年6月) 筑摩書房
桂英澄編 『太宰治研究II その回想』(昭和53年6月) 筑摩書房
(並べて表記した)
『小説新潮』(昭和23年2月号)
『新潮』(平成10年7月号)
相馬正一 『評伝太宰治 第三部』(昭和60年7月) 筑摩書房
滝口明祥 「太宰治と井伏鱒二——『井伏鱒二選集』をめぐって——」『太宰治スタディーズ』2号(平成20年)
滝口明祥 『井伏鱒二と「ちぐはぐ」な近代——漂流するアクチュアリティ』(平成24年) 新曜社
『太宰治全集』(平成10-11年) 筑摩書房(第十一次)
『筑摩書房の三十年』(昭和45年12月) 筑摩書房(平成23年3月復刊, 和田芳恵著)
筑摩書房 『回想の古田晁』(昭和49年10月) 筑摩書房
津島美知子 『回想の太宰治』講談社文芸文庫版(初版は昭和53年, 「三月二十日」は昭和58年講談社文庫版に加えられた)
『展望』(昭和23年3・5月号)
東郷克美 『井伏鱒二という姿勢』(平成24年) ゆまに書房
山崎富栄 『愛は死と共に——山崎富栄の手記』(昭和23年9月) 石狩書房(本稿では「山崎富栄手記」として引用している。)